

社長！見えない債務を開示しておかないと相続時に家族が困りますよ

R.F.C

リスク・カウンセラー & ファイナンシャル・カウンセラー

Information & Report

2007.06.14 Vol.2007-06

◆面見の良い経営者の誓い？

金融機関から運転資金を借入する場合など、中小企業経営者は好むと好まざるに関わらず、連帯保証人になっていきます。

自分の会社の借入金や借入金に対する保証の債務のように決算書上に計上され誰も見えない債務があります。一方、リース契約や友人の会社の借入金に連帯保証人となった時の保証債務など、平時にはなかなか見えない保証債務があります。

ある日、亡くなった知人の家族（相続人）が相続にやってきました。夫が生前に、親友に頼まれて連帯保証人になっていた借入金に対する保証債務の支払請求の書類が送達され、どうしたらよいのかわからないというのでした。

起業してから三十年のA社長は、生粋の江戸っ子。持ち前の竹を割ったような性格と公平無私の面倒見の良さが社員や外注先からも親しまれ、技術面においても常に時代の先を読み、選択してきた仕事の中核にいたこともあり、長かった平成不況も巧みに切り抜けることが出来ました。

外注先の会社は、A社長のもとで働いていた元社員が独立した会社で、社員が独立して会社を創業させた時にも、自分の子供が社会人へと羽ばたかのように喜んで応援していました。

毎月のように関係会社の社長達を集めて技術指導も怠らず、公私ともに、何かあったらA社長に相談できる...といった、外注先の社長達の駆け込み寺のようにさえなっていました。

二十社を超えた外注先の中には、さまざま

◆平時に見えない債務が顕在化

ある時A社長が倒れ、専務だった息子が会社を引き継ぎましたが、闘病生活もむなしくA社長が亡くなりました。

外注先の存在だったA社長を中心としたカリスマ的存在だったA社長を中心とした外注先の固い結束が、急激に薄れていくのを誰も感し始めていました。

外注先も、一社、二社と、新たな取引先を見つけて徐々に遠ざかっていくようになっていきました。後を引き継いだ専務も、生前に社長が口癖のように言っていた「...去る者は追わず」の言葉を思いだし、外注先が自立して

新たな商談が発生するたびにA社長に相談してくる外注先の社長もいましたが、どこかでA社長を超えたいと、密かに新しい仕事を受注していた社長もいました。

A社長にとって、どちらの社長の場合でも変わりなく接することが信条であり「来るものは拒まず、去る者は追わず」と淡々としたものでした。

「来るものは拒まず」とは云々のものの連帯保証人の相続には困惑するものがあります。創業した当初の元社員が経営する外注先では、仕事の内容や資金繰りなどA社長に対しては経営内容がガラス張りでした。運転資金が足りないかと相談を受ければ数百万円を貸し、連帯保証人になって切り抜けさせたこともありました。でもそれもいつまでも続けられませんでした。

外注先の規模が拡大してくると、機械などの設備額も大きくなり、リース契約にも第三者の連帯保証人が必要になったりもします。

◆個人財産の棚卸し(B/S)をする

●財産
 ・現在、換価した場合の金額を評価額に記入。
 ・担保提供している場合は記述する。
 ・生命保険は契約保険金でなく「解約返戻金」を評価金額とする。

●負債
 ・ローンの残高は毎年確認しておく。
 ・自分以外にも連帯保証人がいるか？
 ・自動車ローンは完済しないと自分の名義にならない。
 ・カードローンは必ず払い残高に注意。
 ・会社借入金などの保証債務、親族や友人などの連帯保証人の名前を確認し整理しておく。

●見えない債務
 ・相続放棄を怠っていたリスク
 ・債務を持っていった人の相続人は相続放棄をしておくこと。

見えない「負の相続財産」を家族間では隠さないこと

◆隠れた「負の財産」も相続財産

中小企業経営者の場合、自分が経営する会社の借入金、リース契約、時には仕入先の個人保証など、会社として発生する債務の多くの部分を個人が連帯保証人となっています。

時には、社長の個人だけの保証では与信が得られない場合には、家族、親戚、友人などが連帯保証人になってようやく借入ができた、リース契約ができたということがあります。

したがって、中小企業の経営者は、自分に「負の財産」があった場合、「プラスの資産」だけでなく「負の資産」がどれだけあるかを家族に隠さないことが大切なのです。

社長が亡くなったときに、負の財産の方が多ければ相続放棄をした方がよい場合もあります。相続をした方がよいのか、適切な判断ができるようにしておくというところは負の財産も明らかにしておくということなのです。

そして「プラスの財産」と「負の財産」を整理し、一年ごとに個人財産の棚卸し(B/S)をしておくことをお勧めします。

家族に知られたくない「負の資産」があるのは経営者だけの問題ではありません。サラリーマンであっても同様のことです。親友の連帯保証人になったための多くの悲劇も決して他人ごとではありません。

連帯保証人の恐ろしさを改めて認識し、自分なりの保証債務の限度額を予め決めておくことも経営者として必要なことです。

【おぼろげな時】

あのあめふれられ母さんがくっつき傘をくくると、回しなから連れだつて帰る小学生、学校で作ったのだから傘の柄に思いを込めて描いたてるてる坊主が揺れています。

雨の日も結構楽しいものだ、わざわざ大きな傘を立てて傘を当てる遊んだり、眺めてくれない道路の轍にきた水溜まりを見つけていなさな池を作り笹葉の小舟を浮かべ、堰を壊して流れる小舟と遊ぶ、梅雨の頃の学校帰りに、僅かに尻が残っているオタマシヤシヤを掌にくっつけてチョットした方ババ気分、水田に放すと幾重にも重なる水紋を切つて頼りなげに泳いで橋の根元にたどり着く、板橋区の五数年前の光景を私の脳裏に出します。(細野)



いくことを良しとしていました。

A社長の一周忌が済んで、妻も息子も新しい生活に馴染み始めた頃に事件が起きました。かつて外注先だったB社が倒産したという一報が入ってきました。A社長が現役の時代が外注間で注目を浴び話題になったことある革新的な会社でした。

しかし、B社との取引関係がなくなつてからすでに半年が経っていました。ああ、あゝ気の毒に...と思うものの余り気にも留めていませんでした。

ところが、倒産から間もなく経って、B社が設備をした時のリース契約の保証人は代表のB氏とあとの一人が父のA社長でした。

そのA社長の相続人に対して三千五百万円に備えていた「残リース」の保証債務額として一千六百万円の支払を求め書類が送達されてきたのです。

相続人にとっては、まさに寝耳に水の話し



梅雨の季節に似合う花はアジサイばかりではありません。「ムラサキツユクサ」の小さな花卉からこぼれそうなガラス玉のような雫。ひときわ花を引き立てています。

●有ることの貧しさ…。無いことの豊かさ…。

アパートの6畳の部屋で親子9人が生活していた。祖母、両親、子供たちの何となくサバイバルな感じの生活が始まりました。もちろん風呂もありません。トイレとお勝手が共同で、水はアパートの外にあった手押しの井戸から汲んできていた。井戸の水は鉄錆が混じっているらしく、掌に掬うと赤い浮遊物がみえそのまま飲み水としては利用できません。手ぬぐいで作った袋を井戸の蛇口に被せ、そこを通した水は4斗樽で作った濾過装置を通してやっと飲み水になる。4斗樽の底には墨をきれいに敷き詰める。その上に網状の棕櫚の皮を敷き、更に砂を5cmぐらいの厚さに敷き詰める。墨、棕櫚、砂の層を2段重ねて最後に棕櫚の皮を被せて出来上がります。1ヶ月に一度、その濾過装置の清掃をします。一段ごとにきれいに洗います。鉄錆で真っ赤になった墨はタワシで洗い落とし再び元に戻します。初めは大人達の仕事でしたが、幸いにも兄弟が多かったので子供達は結構その作業を楽しみながらやるようになっていました。

やがて、四畳半の部屋をもう一部屋借りられるようになり、少しだけゆったりと寝られるようになりました。ひと部屋増えたときのことは今でも忘れません。まだ何も置いてない部屋に仰向けになり…開け放ってある窓から空を仰いで見たときの真っ白な流れる雲…、そよ風…。その頃、母が口ずさんでいたエノケンの「私の青空(My blue heaven)」という歌が遠いどこかから聞こえてくるような気がしました。

～♪～夕暮れに 仰ぎ見る 輝く青空。日が暮れて たどるは 我が家の細道。～♪～ 狭いながらも 楽しい 我が家 愛の火景の さすところ 恋しい家こそ 私の青空。～♪～

今でもこの歌を聴くと目頭が熱くなってくるのですが、仕事やプライベートで辛くなったときに心の傷を洗い流してくれる神聖な清浄水のような歌です。

一番下の妹が5歳になった頃のある日に高熱を出し、数日間こわっていた高熱は治まったものの手足が思うように動かさないといい状況になっていました。すぐ入院することになり、「脳性小児麻痺」という残虐な診断結果が両親に言い渡されました。医師の望みを託しましたが、脳の手術に挑んでくれた医師から手術による治療が無理であることを告げられ、家族に見守られながらの生活が始まりました。

これといった治療もできないまま家族が交代で看病にあたる日々が続きました。徐々に言葉も自由に話すことができないようになり、自由に歩くこともできなくなると家の中では這って移動するようになっていました。やがて妹は寝たきりの生活になってしまいました。

いまにして思うと、その瞬間が、妹が「神様」になったときだったのだと感じてなりません。

それでも、親にとっては子供が多かったのは何よりのことでした。兄弟姉妹だけでなく、その友達までもが妹を気遣ってくれたことを思い起こすと涙が出てきます。いつも遊びの輪の中心には寝たままの妹がいました。何にもなかった小さな部屋でも、明るく大きな笑い声がいっつも絶えませんでした。

●銀(しろがね)も金(こがね)も 玉(たま)も何せむに 勝れる宝子にしがめやも

そして、妹は多くの人に看取られながら23歳で世界しましたが、真っ青に晴れわたった告別式の日、真っ白で柔らかな…ゆったりと流れる雲から雲へと…天に昇って自由に走り回っている姿が見えました。
「銀(しろがね)も 金(こがね)も 玉(たま)も何せむに 勝れる宝子にしがめやも」

リスク・カウンセラー奮闘記・37

狭い我が家の柱には、何故か「山上憶良」のこの歌を書いた短冊が掛けられ、鴨居には「教育勅語」の額が掛けられています。毎日、川の字になって寝るたびにそれが視線にはいるように掛けられていました。「朕惟フニ…(中略)…臣民父母二孝二兄弟二友二夫婦相和シ朋友相信シ…」と文語体の文章を読んで聴かせられました。もしかしたら意図的にそこに掛けていたのかも知れません。

母は、近所の人にも、家にたずねて来る人にも、私たちの友人に対しても、平然と子供自慢をしている人でした。子供の数が多きこともこの上ない自慢のようでした。亡くなった妹のことも「笑顔が素晴らしい子なんですよ…」を嬉々として自慢話をしていました。隠し事があつたりすると、子供ながらも多少の後ろめたさを感じる時もありましたが、照れくささと「親を悲しませてはいけないなあ～」という気持ちが芽生えていたようにも思います。

リスクカウンセラーとして相談を受けているのですから、どんなご相談でも全てを私にお話しして下さることは信頼関係が築ける第一歩だと思っています。

でも、家族のことや、事業のことで相談に来られる方々とお話ししていて、自分のお子さんのことを酷い言葉でクソミソに言う親御さんの話を聴くことがしばしばありますが、そんな方のお話しを聴いているととても辛くなってしまいます。

「子は親の鏡」と言う言葉を思い出すと、自分自身でも恥ずかしくなることがいっぱいあります。せめて…親として我が子のことは精一杯の気持ちで、褒めてあげなくては行けないのだと思います。

何もなくても幸せな家族、そして豊かな心を持っている人は、親が子供を褒めてあげることから始まるのではないのでしょうか。

●有ることによって…より欲しくなる心が生まれる？

お金、不動産、宝石、衣装、自動車、美貌(?)…、人間って、少しでも何かを持っていると他人の持ちものと比べたくなるのでしょうか。

「持っているものは失いたくない」と言う気持ちが身体どこかから湧いてきて、失うところか、他人より少しでも多く欲しくなるといい気持ちになってくるのでしょうか。

自分の私利私欲のために生きている人、相続財産を争うことも、法を犯してまで事業を拡大する社長、人を殺してお金を奪う人…そんな人たちを「貧しい心の人」と言いきってしまうのは過言でしょうか？

多くの財産を持っている人、公職の高い地位にいる人、競い合い実力で名誉を勝ち取った人達をみたとき、「すごいね!」とは思ふものの、その人が「心穏やかで豊か」かと言えば必ずしもそうとは思えません。ご自身が心を病んでいることにさえ気づかない人が多いのではないのでしょうか。

以前、「不動産とリスク」というテーマで講演をさせていただいた際のことです。不動産に対するリスクを回避するために一番大切なこととは何なのかという質問をいただきました。余りにも漠然とした質問であったのと、とっさの事だったので講師だから答えなければいけません。思わず言ってしまったのは「不動産を持たないことです…。持たない人はリスクを考えません」と答えてしまいました。答にならない答だったのかも知れませんが、自分なりに今でもそう思っています。何にも持たなくなると幸せは本人が感じ取るものですよ。皆さんはどのように思われますか？



関東地方の梅雨入り宣言を待っていたかのように咲いていた「タチアオイ」の花は、一番先まで花が咲く頃に梅雨が明けることから別名「ツユアオイ」ともいいます。

◆=◆=リスクカウンセラー・四方八方巷談=◆=◆

googleで「リスクカウンセラー」と検索してください。
<http://risk-counselor.seesaa.net/>

QRコードから読み込んでください。
帯電話から「ブログ」を読めるようになります。



◇ 発行者 株式会社ホロニクス総研 〒113-0033 東京都文京区本郷1-35-12 かんだビル7階
◇ 責任者 代表取締役・リスクカウンセラー 細野 孟 士 (t-hosono@holonics.gr.jp)
◇ 連絡先 Phone (03) 5684-0021 Fax. (03) 5684-0031 <http://www.holonics.gr.jp>

【ホロニック】(英: Holonic) 全体(ホロス)と個(オン)の合成語。すなわち組織と個人が有機的に結びつき全体も個人も生かすような形態を言う。生物は個々の組織が自主的に活動すると同時に独自の機能を発揮する一方でそうした個が調和して全体を構成する(小学館「カタカナ語の事典」より)